

第1章

階段を上がると、秋の音がした。

振り返って、踊り場を見る。

隅に枯れ葉が落ちていた。誰もいない。

静かな廊下を進み、扉の前に立つ。「読書部」の貼り紙を見上げてから、扉を開けた。

開いている窓の近くに、短髪の背中が立っていた。

「あいかわらずですね、先輩」

背中が振り向く。

「まったくだ、後輩」

先輩が椅子に座る。それを待ってから、机を挟んだ、前の椅子に座った。

「何がですか、先輩」

「何がでしょう、後輩」

「先輩」

先輩が目をそらす。

「はい、お願いします！」という声が、開いている窓から聞こえた。運動部の練習が、始まるようだ。

「大宮さんが言ったから」

「何をですか？」

「あいかわらずですね、と」

「言いましたけど」

「その通りだな、と」

「まったくだって、言いませんでした？」

「あれ、そうだったかな」

「忘れた、という言い訳はなしですよ」

「厳しいね」

「知りませんでした？」

「知ってる、知ってる」

「先輩」

先輩が両手をあげた。降参したらしい。

「あいかわらず、暑いね」

先輩の声が聞こえたので、顔を上げた。読んでいた本を、机に置く。

先輩は、ノートを眺めていた。

「もう夏は終わりましたけど」

「暦の上では、そうだね」

「昨日は、肌寒かったですよね」

「そうだったかな」

「忘れたことにしておきますね」

「僕は、よき後輩を得たものだ」

「何の話ですか？」

「毎度、ご苦労さまです」

先輩が敬礼する。無視することにした。

「ところで、そのノートですけど」

「ああ、読書報告の」

先輩からノートを受け取る。青色の表紙に、黒字で「読書報告」と書かれている。

「お互いが読んだ本について、記録するんですよね？」

「ちょうど、大宮さんが前回書いたところを読んでいたよ」

「これ、私しか書いていませんよね」

「あらあら」

「やろうと言いだしたのは、先輩ですけど」

「まあまあ」

「先輩」

先輩が右手を上げた。

「はい、釈明をどうぞ」

「未知のものがあるのって、素晴らしいよね」

「その心は？」

「謎めいたものは、そのままにしておこう」

「まったく意味がわかりませんが」

「放っておけばいいと思うよ」

チャイムが鳴って、先生が出ていく。

教科書とノートを片付けていると、前の席の背中が振り返った。

「けーちゃん、けーちゃん」

ショートヘアの女子が、笑顔で言う。

「石井さん、何？」

「もう」

「え？」

「いや、いいけどさ」

石井さんは、口をとがらせている。

「石井さんは、どうして私のこと、けーちゃんって、呼ぶの？」

「え、変かな」

「最初から、そういう呼び方だなんて」

「名前、恵だよね」

「うん」

「だから、けーちゃん」

「けいちゃん、ではなくて？」

「ではなくて」

「そう」

「あ、嫌かな？」

「そんなことはないよ」

「じゃ、私のこともさ」

「何が？」

「私の名前、奈緒子」

「そう」

「うん」

「うん」

「けーちゃん」

「うん？」

「強いね」

「知ってる」

放課後になり、職員室に向かった。

「失礼します」

棚がある奥まで進む。

鍵を取り、棚に一番近い席を見る。座っている背中に、声をかけた。

「先生、読書部、始めます」

メガネをかけた顔が、振り向く。

「そうか」

「はい」

間があった。成上先生は、何も言わない。

「では、失礼します」

「大宮」

「はい？」

「古西は、どうした？」

「先輩は、部長会議に出席するそうです」

「ああ、今日だったか」

「はい」

また間があった。

「古西が戻るまで、一人だな」

「そうですね」

「そうか」

「はい」

「わかった。行っていい」

「失礼します」

扉の前に立って、「読書部」の貼り紙を見上げた。

鍵を開けて、部室に入る。

窓を開けると、楽器の音が聞こえた。吹奏楽部の練習だろう。

椅子に座ると、窓から風が吹いてきた。

しばらく、風の香りをかいだ。

扉の開く音がした。

「今日は、大宮さんが先着だね」

読んでいた本から顔を上げると、立ったまま、先輩が

言った。

「部長会議は、終了ですか」

「ようやくね」

「お疲れさまです」

「まったくだ」

先輩が椅子に座りながら、首を振る。

「めずらしいですね」

「え？」

「先輩が、お疲れです」

「まったくだ」

「二回目ですよ、それ」

「歴史は、繰り返すものだよね」

「浅くて、薄い歴史ですね」

「部員、もっと増やしたい？」

部室の鍵をかけながら、先輩が言った。

「何ですか、急に」

暗い廊下を、並んで歩く。

他の部活は、終わっているようだ。月明かりが、廊下を照らしている。

「やぶの中から棒を出してみました」

「何の話ですか」

「やぶから」

「先輩」

静かになった。

「先輩は、どうなんですか？」

「どうって？」

「部員の数について、見解をお願いします」

「少数精鋭だね」

「弱小ですけど」

「選ばれし者だから」

「私たち、何に選ばれたんですか？」

「生まれながらの貴族」

「部員を増やそうという意欲、ないですよね」

「けーちゃん、次、移動だよ」

振り向いた石井さんが、言う。

ちょうど、物理の教科書とノートを机に出したところだった。

「そうだね」

「一緒に、行こう」

「うん」

教室を出て、階段を上がる。

「石井さんって、陸上部だよね？」

「うん。けーちゃん、陸上部に入りたいの？」

「いや、そういうわけでは」

「急に、どうしたの？」

「部員、多いんだっけ？」

「うーん、運動部にしては、少ないかも」

「そうなんだ」

「地味だからさ」

「そうなの？」

「どうしても、インパクトが、ね」

「そういうものかな」

「そういうもの」

廊下を曲がる。物理実験室の扉が、正面に見えてきた。

「けーちゃん、読書部でしょ？」

「うん」

「部員が、たった二人の」

「そうだね」

「大変そうだよね」

「え、どうして？」

「二人だけなんだから、お互い上手くやらないと」

「あ、それは大丈夫かな」

「先輩と仲良くやれてるの？」

「お互いに無関心を貫いている」

「それ、楽しいの？」

扉を開けて、部室に入ると、先輩が椅子に座るところだった。

「部長会議で、何かあったんですか？」

「え？」

「部員数の件です」

「ああ」

先輩が、口を閉じた。

「珍しいですね」

「何が？」

「いえ、別に」

机を挟んだ、前の椅子に座った。

先輩は、開いている窓を眺めている。

「この学校の部活で、部員の数をもっとも少ないのが、ここだから」

「部員が一人のところって、ないんですか？」

「らしいよ」

「そうですか」

「ですよ」

「部員の数が少ないこと、気になるんですか？」

「うむ」

「結局、何があったんですか？」

「すべて世は事もなし」

「ごまかせていませんよ」

「大宮さん」

昼休み、女子トイレから出ると、声をかけられた。

振り向く。同じクラスの、見知った顔が、手を振っていた。

「あ、下田さん」

下田さんが、近づいてきた。長い髪が揺れる。

「下田さん、図書室？」

「あ、違うよ。今日は、部活のミーティング」

「文芸部の？」

「そうそう」

「大変だね」

「運動部でもないのに、ミーティングなんて、どうなのって感じ」

「何の話だったの？」

「今、同人誌を作っていて、その件で」

「そうなんだ」

並んで廊下を歩く。

「大宮さんは？」

「え？」

「読書部は、どう？」

「自由に、のびのびと、かな」

「あれ、そうなの？」

「え、どうして？」

「文芸部の先輩に、去年まで読書部だった人が、何人かいるんだけど」

「え」

「色々と、あったみたい」

「色々って？」

「詳しいことは、聞いていないんだけど」

「私が入部した時は、先輩が一人いるだけだったから」

「あの、前に教室に、大宮さんと呼ばにきた人？」

「うん」

「どんな人？」

「うむ」

「先輩、お聞きしたいことが」

手元の本を机に置き、先輩が顔を上げる。

「何なりと」

「この読書部って、私が入部する前は、もっと人数が多かったと聞きましたけど」

「ああ、そうだね」

静かになった。

「先輩？」

「ん？」

「石のようになってますけど」

「ついに、不動の心を手に入れたところだよ」

「先輩」

静かにならなかった。

「それは、どこからの情報なのかな」

「同じクラスに、文芸部の人がいるので」

「なるほど」

「どうして、その人たち、退部したんですか？」

「それは、僕が知りたいよ」

「え？」

「もめたわけでもない。険悪な雰囲気になったわけでもない」

「それなのに、ですか？」

「何もなかったからじゃないかな」

「何も？」

「今と変わらず、何も」

「そういうものですか」

「部活に入ったからには、何かしたくなるんじゃない？」

「先輩は、残ったんですね」

「退部していたら、今ここにはいないよ」

「何もないのに、ですか？」

「何かあるわけではないけど、何もないわけでもない」

「よくわかりませんけど」

「そういうものだよ」

「いつも通りですね」

「大宮さん」

「はい」

「言うようになったね」

「一体、誰のせいなんでしょうね」

第 2 章

「けーちゃんに、報告したいことが」

休み時間になり、数学の問題を解いているところだった。

ノートを閉じ、石井さんを見る。

「え、報告？」

「あるのであります」

石井さんは、敬礼している。

「何？」

「もう」

「何？」

「わが陸上部に、新しい部員が入ったのであります」

「この時期に？」

「うん」

「ほかの部活をやめて、入ってきたの？」

「そう、剣道部だったかな」

「そういう人、珍しいの？」

「入っている部活を変えるのは、そうかもね」

「そうなんだ」

「途中でやめるだけなら、結構、いるみたいだけど」

「運動部は、そういうの、ありそうだね」

「読書部は、どうなの？」

「うん？」

「部員、増えそう？」

「どうかな」

「難しいよね、お互い」

「最近、考えていたんだけど」

部室に入り、椅子に座ると、先輩が言った。

「何ですか」

「部員を増やすのは、険しい道のりだね」

「ほかの部活をやめた人って、いますよね」

「いるだろうけど、また新しい部活に入ろうとは思わないんじゃないかな」

「じゃ、部活に入っていない人って、いますよね」

「おそらく、少しは」

「そういう人たちにアピールするのは、どうですか？」

「アピール？」

「読書部って、何をやっているのか、謎ですよ」

「部員がそれを言っちゃうくらいにはね」

「たとえば、夏休み、活動を一切しませんでしたけど」

「それは、自宅待機というか」

「何を待っていたんですか？」

「夏の間、貯蓄したやる気は、秋まで大事に持っておこう」

「二学期になっても、目新しいことは、特にしていませんけど」

「目には見えないからね」

「やる気を感じられない言い方ですね」

「いつも心に太陽を」

「ぜひ、行動で示してください」

「図書室」と書かれたプレートを見上げた。

扉を開ける。古い本の匂いに包まれる。

長方形の机が並び、多くの頭が見えた。

奥の開架スペースにも、たくさんの制服姿がある。
本の返却の手続きが完了するまで、その様子を眺めた。

「ふと思ったんですが」

先輩は、閉じた窓を眺めていた。雨が降っていて、外は暗い。

「そのまま、口に出さないという選択肢もあるよ」

「先輩」

静かになった。

「本を読みたければ、図書室がありますよね」

「そうだね」

「家から持ってきて、休み時間に読むこともできますよね」

「読みたければ」

「読書部に入る必要、ないですね」

「まあね」

「認めちゃいましたね」

「追いつめるね、大宮さん」

「追いこむことで、打開策が生まれるのではないか、と」

「何も出てこないみたいだよ」

先輩は、天井を見ている。

「文芸部も、ありますよね」

「あるね」

「本や小説となると、まず文芸部が思い浮かびますよね」

「だろうね」

「読書部の出番、ありませんね」

「反論の余地がない」

先輩が、天井を指さした。

「やっぱり、何も出てこないみたいだよ」

「もう、このままなんですかね」

「敵が多いということ」

「だから、何です？」

「燃えてきたね」

「暑苦しいので、近くに来ないでください」

「あ、大宮さん」

部室に向かおうと、階段を上がるどころだった。

下田さんが、階段を下りてくる。

「これから、読書部に？」

「うん。下田さん、部活は？」

「今日は、解散ということになって、もう帰るところ」

「早いね」

「実はさ」

下田さんが、近付いてくる。

「部員が、やめちゃって」

小声になった。

「そうなの」

「それで、今、大変なんだ」

「でも、文芸部は人数、多いから」

「部員が多いと、それはそれで、色々あるから」

「色々」

「読書部が、うらやましいな」

「え？」

「人数は少なくても、仲、よさそうだから」

「悪くはないけど」

「けど？」

「よくもない」

「どっちなの」

そう言って、下田さんは笑った。

「先輩、何をしているんですか？」

顔を上げると、先輩が腕を組んでいた。

机の上に、開いたノートが置いてある。

「考えているふり」

「それ、読書報告のノートですよね」

「さあ、どうだろう」

「先輩」

先輩は、ノートを静かに閉じた。

「書く気になりましたか」

「いや、そんな気になれなくて」

「今、書こうとしてましたよね」

「気のせいだと思いますよ」

「部員の数が増えれば、ノートもすぐに埋まりますね」

「増やすことも大変だけど、その後のこともあるよね」

「え？」

「増えた後も、それを維持するのは、難しい」

「そうですね」

「たった一人の後輩の相手をするだけで、手一杯だよ」

「私だけなら、何とか相手ができるってことですか？」

「頭痛の種ぐらいかな」

「見くびられたものですね」

「おや、頭が痛くなってきた」

「気のせいだと思います」

チャイムが鳴って、先生が出ていく。

石井さんが、振り向いた。

「けーちゃん」

「何？」

「名前を呼んだだけ」

石井さんは、笑った。

「石井さん」

「うん？」

「名前を呼んでみただけ」

「大宮の逆襲だ」

石井さんは、また笑う。

「そういえば、陸上部に途中で入部した人、剣道部だったよね？」

「そうだよ」

「その人は、どんな様子？」

「すぐに、みんなと仲良くなったよ」

「へえ」

「タイムもいいから、期待されているって感じ」

「そうなんだ」

「読書部は？」

「え？」

「部員、増えないの？」

「そうだね」

「けーちゃんが、いるのに？」

「どういうこと？」

「こんなに美人の部員がいるのにね」

「石井さん」

「うん」

「ありがとう。私も、石井さんの笑顔、好きだよ」

「それなら、石井さんって呼び方、改めるべきだよね」

「石井さん」

「険しい道のりだ、こりゃ」

石井さんは笑って、敬礼した。

「コロンブスだよね」

顔を上げた。読んでいた本を、机に置く。

先輩は、部屋の隅を見ている。段ボール箱が四個、積みまれている。

「何の話ですか？」

「人を集めるには、楽しいことをして、それを見てもらわないといけない」

「ですね」

「だけど、それを見てもらうためには、まず人が集まらないと、広まらない」

「この読書部の話ですか？」

「まあね」

「結局、まず何から始めればいいんですか？」

「卵かな」

「は？」

「それとも、鳥かな」

「先輩」

「やっぱり、コロンブスだよね」

「よくわかりませんけど」

「そういうものだよ」

「もう、いいです」

「先輩に質問です」

先輩は、開いている窓を眺めていた。少し冷たい風が、部室に入ってくる。

「何かね、後輩」

先輩は腕を組んだ。

「結局、どうするんですか？」

「え？」

「部員を増やすために、です」

「ああ」

静かになった。

「先輩？」

「ん？」

「それで？」

「うん」

先輩が両手をあげる。

「結局、何もしないんですね」

「まあ」

「ここしばらく、話し合ったのに、ですか？」

「鍵は、かかっていない」

「何の話ですか？」

「今は、それでいいよ」

「先輩」

「はい」

「最終回みたいですね」

「何も始まっていないと思うよ」

「そうですか」

「まだ、何も」

その時、扉をノックする音が聞こえた。

「失礼します」

扉が開き、男子が一人、入ってくる。短髪で、背が高い。低い声だった。

「ここ、読書部、ですよね？」

先輩と顔を見合わせる。

「先輩」

「え、ああ」

先輩が椅子から立ち上がる。手を差し出しながら、言った。

「ようこそ、読書部へ」